

## 高野山開創 1200年～その歴史と文化～

高野山大学名誉教授 山陰 加春夫

### 1 高野山という空間

高野山（和歌山県伊都郡高野町）は、標高一〇〇〇<sup>メートル</sup>前後の峰々と、それらに囲まれた標高八二〇<sup>メートル</sup>ほどの盆地状の平坦地の総称である。平坦地は東西四<sup>キロ</sup>、南北二・三<sup>キロ</sup>の広がりを持ち、その中央部を西から東に御殿川が貫流する。西部に壇場 伽藍、東部に奥之院があり、壇場伽藍・奥之院を除く平坦地には、高野十<sup>じゅうだに</sup>谷と呼ばれる谷々が展開している。二〇〇四年（平成十六）世界遺産に登録（「紀伊山地の霊場と参詣道」）。

本講演で使用する用語について なお、本講演で使用する用語について一言。すなわち、「空海」と記す場合には、宝亀五年（七七四）に讃岐国多度郡屏風浦（香川県善通寺市）で生まれ、承和二年（八三五）に高野山において六十二年に及ぶ現世での生涯を終えた歴史的な存在としての弘法大師空海を、「弘法大師」と記す場合には、永遠の生命と限りないパワーを持つ霊的存在としての弘法大師空海を、それぞれ指す。

### 2 空海の高野山開創

大同元年（八〇六）、空海は、唐から帰朝する際の漂流する船上で、神々に対して、「帰朝の日、必ず諸天（神々）の威光を増益し、国界（国家）を擁護し、衆生（生きとし生けるもの）を利濟せんがために、一つの禅院を建立し、法によって修行せん。願わくは、善神護念して、早く本岸に達せしめよ。」との誓願を立てた〔「沙門空海書状（布勢海宛）」『高野雑筆集』（『定本弘法大師全集』第七卷）卷上〕。約一〇年後の弘仁七年六月に至って、空海は、その誓願の実現のために、満を持して高野山上に「修禪の院」を建立せんことを請う「上表文」〔『性靈集』（『定本弘法大師全集』第八卷）卷九〕を提出した。翌月、これが許可され、ここに高野山金剛峯寺はその第一歩を踏み出した。

ところで高野山は、空海にとって実は旧知の山であった。前掲「上表文」には、「空海、少年の日、好んで山水を涉覧しき（歩き回った）。吉野より南に行くこと一日、更に西に向かいて去ること兩日ほどにして、平原の幽地あり。名づけて高野と曰う」と記されているのである。

### 3 撰関・院政期の高野山

撰関家・王家の高野参詣 十一～十二世紀（撰関・院政期）に至るや、治安三年（一〇二三）の入道前太政大臣藤原道長の「弘法大師廟堂」（以下、廟堂と略称。）参詣を

初例として、永承三年（一〇四八）関白頼通、永保元年（一〇八一）同師実、寛治二年（一〇八八）白河上皇、天治元年（一一二四）鳥羽上皇、……と摂関家・王家の登山が相次ぎ、またその都度、荘園・堂塔・子院（本寺に付属する小寺）などが金剛峯寺に寄進・造立された。当該時期、同寺は、このような摂関家・王家の支援によって、ようやく中世寺院として再出発することができたのである。

**高野山信仰と入定信仰と** これら摂関家・王家の高野参詣は、小野僧正 仁海（九五一一〇四六）や祈親上人 人定 誓（九五七一一〇四七）らの熱心な唱導によって、十一世紀以降、次第に流布しはじめた高野山信仰と入定信仰に基づくものであった。

高野山信仰とは、高野山は前仏（釈迦如来）の浄土、後仏（弥勒菩薩）の法場（説法の場）であって、ひとたびこの地を踏めば地獄・餓鬼・畜生の三悪道に墜ちることなく、ひとたびこの山に詣でれば必ず三会の暁に会うことができる、という信仰のことである。

三会の暁とは、弥勒菩薩が釈迦如来の入滅から五十六億七千万年のちに兜率天から人間世界に下って、龍華樹の下で悟りを得たのち、三度の法会を開いて、迷っている二八二億人もの人々を救済する、その時のことをいう。

また入定信仰とは、弘法大師（霊的な存在）が今もなお高野山奥院の廟堂内に生身のままでおわさっていて、五十六億七千万年後に弥勒菩薩がこの世に出現するその時まで、人々を救済し続けている、という信仰のことである。

#### 高野山参詣の五つの功德とは？

（１）一度でも高野山に参詣すれば、心身ともに健康になれる。

【「一度も此地を（踏）ふむ者は、界外無漏の功德（現実を超越した清らかな最上の功德）を備えて、四重五逆の罪障を滅ぼす」『平家物語』】

（２）一夜でも高野山に宿泊すれば、仏になる（悟りを開く）ことができる。

【「一夜も彼の山に宿る者は、本有万陀羅界会を開（運）て（生まれつき具わっている仏性が顕現して）、三十七尊の尊位につらなる（仏になることができる）」『平家物語』】

（３）奥之院御廟にお参りすれば、この世を安らかに暮らすことができる。

（４）奥之院御廟にお参りすれば、来世に極楽（阿弥陀如来の浄土）に往生することができる。

【「我朝<sup>わがちよう</sup> 高野の御山に、目<sup>ま</sup>当<sup>あた</sup>り生<sup>しやう</sup>身<sup>じん</sup>の大師入定しておわします。(中略) 生身普遍して、慈尊<sup>(待)</sup>の出世をま<sup>(姿)</sup>ち、六情(喜怒哀楽愛悪の六種の情)かわらずして、祈念の法音<sup>きこしめ</sup>を聞<sup>き</sup>召<sup>め</sup>す。是故<sup>このゆえ</sup>に現世の利生<sup>げんぜ</sup>も憑<sup>りしやう</sup>あり。後生<sup>たのみ</sup>の引<sup>ご</sup>導<sup>しやう</sup>も疑<sup>うたがい</sup>なし。」『平家物語』】

(5) 奥之院御廟にお参りして、高野山とご縁を結べば、五十六億七千万年後に高野山奥之院で開催されるビッグ・イベント(大講演会)のチケット(予約券)を手に入れることができる。

【元亨四年(一三二四)四月十一日「紀伊国官<sup>かんしやう</sup>省<sup>ふのしやう</sup>符<sup>しも</sup>莊<sup>がた</sup>下方<sup>おおや</sup>大<sup>むら</sup>藪<sup>じゆう</sup>村住尼妙蓮御影堂陀羅尼田寄進状」(『高』之二、続宝六一一三〇)

高野山は、弘法大師が入定された聖跡、諸仏がお集まりになる浄域です。過ぎ去った歳月はすでに五百年。仏前に供える香と花は、はるか五十六億年後の春暁を約束しています。五十六億年後に、弥勒菩薩が出現され、かつ弘法大師<sup>しゆつじやう</sup>が出<sup>し</sup>定<sup>じやう</sup>される時、昔、高野山と縁を結んでいた人は、その時に弥勒菩薩と弘法大師からありがたい説法を聴くことができます。どうして一花一香の供養<sup>いちげいっこう</sup>を捧<sup>とく</sup>げ<sup>だつ</sup>て得<sup>とつ</sup>脱<sup>つか</sup>得<sup>か</sup>果(苦界を脱して悟りを得ること)の約束をしない人がおりましたか。】

#### 4 江戸時代以後の高野山

**高野山の四つの顔** 江戸時代の高野山は、(ア)高野山麓に二万<sup>こく</sup>一三〇〇石<sup>しゆいんち</sup>の朱印地(幕府公認の寺領)を有する宗教領主(江戸に参勤交代を行う日本最大の<sup>だいみやうかく</sup>大名格寺院)であり、(イ)空海が建立した「修禅の一院」そのものである壇場伽藍を本部とした「学問の道場」であり、(ウ)奥之院の弘法大師の廟堂を中心にした日本有数の「信仰の霊場」であり、そして(エ)高野十<sup>じゆうだに</sup>谷と呼ばれる谷々に僧侶・俗人の男性だけが集住する「聖俗空間(聖にして俗、俗にして聖なる地域)」であった。

**宗教領主** 戦国、安土桃山時代の難局を乗り切った高野山金剛峯寺は、江戸時代には紀ノ川以南、貴志川以東の伊都・<sup>な</sup>那<sup>が</sup>賀<sup>が</sup>両郡に二万<sup>こく</sup>一三〇〇石の一円寺領(朱印地)を有して、その上に君臨する<sup>まが</sup>紛<sup>う</sup>か<sup>た</sup>な<sup>き</sup>大寺院となっていた。同時代、かつての<sup>なん</sup>南<sup>と</sup>都<sup>ほくれい</sup>北嶺(興福寺と比叡山延暦寺)の一方の雄たる興福寺の寺領が春日社領とあわせて二万<sup>こく</sup>一三〇〇石、また天台宗の関東総本山たる<sup>とうえいざん</sup>東叡山寛永寺のそれが一万二〇〇〇石であったことを考えれば、当該時代、金剛峯寺は、その<sup>わぎやう</sup>知<sup>こく</sup>行<sup>だか</sup>石高についていえば、日本最大級の正統派寺院と

して確固たる地位を保持していたのである。院政期にはまだ「真言・南都系の有力な隠遁の別所の一つ」であるにすぎなかった金剛峯寺は、かの「兎<sup>うさぎ</sup>と亀<sup>くまがめ</sup>の寓話」の「亀」のごとく、中世を通じて、地味ではあっても弛<sup>たゆ</sup>まぬ努力を続けた結果、ついに、はるか先を疾走していた南都北嶺という「兎」を追い越したのである。

**学問の道場** 一五四九年十一月に、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエル（一五〇六一五二）が鹿児島で書いた手紙の中には、高野山が「中世日本の六大学」の一つである旨が記されている——他の五大学は、京都の<sup>ござんかんじ</sup>五山官寺、根来寺、比叡山延暦寺、大津市の<sup>みいでらおんじょうじ</sup>三井寺園城寺（又は櫻井市の<sup>とうのみねでら</sup>多武峰寺）、足利市の足利学校の五つ——。

ここでいう大学とは、中世ヨーロッパ型の大学を指している。すなわち、十六世紀当時の高野山は、パリ大学やオックスフォード大学などと同じく、「ユニバーシティ自体は、もともと固有の建物を持たず、むしろその下に形成されたカレッジ（学寮）を主要な教育・訓育の場とする」大学である由が載せられているのである。

**信仰の霊場** ルイス・フロイス（一五三二—一九七）の『日本史』第二部六七章には、この高野山には、三千～四千人の僧侶がおり、また同山においては、弘法大師が「数千年を経て、弥勒菩薩と称する他の仏とともに来たって、世界を再建する」ことを約束したメシア（救世主）である、と固く信じられている。旨が記されている。ここには、高野山が全国の「入定信仰」の総本山であることが語られている。そして同書第三部三〇章には、

（高野山は）日本中でもっとも多くの人々が参詣する巡礼地の一つである。弘法大師の（像の）前では、昼夜を分かつたず、常に無数の<sup>しんちゅう</sup>真<sup>ちゅうちん</sup>鍬<sup>こうこう</sup>の提<sup>とも</sup>灯が煌々と灯されている。

と載せられている。当該時期の高野山は、弘法大師というメシアが内外から<sup>すうけい</sup>崇敬を集める「宗教団体又は共和国」であった、とすることができよう。

**聖俗空間** 江戸時代の高野山は、山上のほぼ全域が金剛峯寺の境内地となっていた。正保三年（一六四六）三月の<sup>ごこうぎにたてまつるいっさんず</sup>「御公儀上一山図」（金剛峯寺所蔵。以下、「正保三年図」と略称。）には、壇場伽藍を中心にして、おびただしい数の子院が描かれている。

この「正保三年図」に付属する「高野山絵図之帳」（金剛峯寺所蔵。以下、「絵図之帳」と略称）の帳尻記載によれば、子院の総数は一八六五軒。その内訳は、<sup>がくりよ</sup>学侶坊（学問僧の寺）二一〇軒（<sup>せいがんじ</sup>青巖寺を除く）、<sup>ぎょうにん</sup>行人坊（修行僧の寺）一四四〇軒（<sup>こうざんじ</sup>興山寺を除く）、<sup>ひじり</sup>聖坊（隠遁僧・回国僧の寺）一二〇軒（<sup>だいとくいん</sup>大徳院を含む）、<sup>きやく</sup>客坊（客分僧の寺）四二軒、その他五三軒であった。

## 5 聖地の歴史から学ぶこと

鑿阿上人の勸進活動 治承・寿永の内乱直後の文治二年（一一八六）五月、高野山の勸進僧鑿阿上人（？一一二〇八）は後白河院庁に、備後国大田莊（広島県世羅郡世羅町）を以て金剛峯寺根本大塔領とし、長日不断金剛・胎蔵両部大法の用途料に充てるべきことを奏上した（前掲・同月「後白河院庁下文」所引「沙門鑿阿解状」）。

鑿阿上人は、同「解状」（願い状）において、（一）内乱下で塗炭の苦しみを味わったすべての存者・亡者の安心・成仏のために、根本大塔において昼夜間断なく金剛界と胎蔵界（正しくは大悲胎蔵生）の供養法を行うべきこと、（二）そしてその利益は、日本国のみならず、あまねく十方界（全世界）に及ぼすべきことを述べている。

後白河法皇（一一二七—一九二）は、上人の「魂を焦がし、肝を焦がす」という熱い思いに感動し、即座にこの願いを聞き入れた。翌三年五月から当該供養法は大田莊年貢を財源として開始されたのである。

ところで、大田莊は根本大塔領となったものの、文治三年当時、「源平騒動の間、庄内損亡して殆ど荒野のごとし」〔建久五年七月七日「僧鑿阿起請相折帳」（『高』之一、宝三五—四三四）〕といわれる有様であった。鑿阿上人は、その後の数年間、現地で勸農に努めた。上人は目が不自由であったために弟子の介助を必要とすることが多かったと推察される。けれども、その姿は、右足の中風を押して京都神護寺の塔材木を「すゝめひしりが門ごとにすゝめあるくがごとく沙汰し」た上覚房行慈（貞応三年十月二十日「行慈書状」〔「神護寺文書」（『鎌倉遺文』五卷三三〇—一）〕と同様であったに違いない。そして「作田やうやく本数（もとの数）を開き、作畠すでに本数に近し」という段階に至った時、上人は、自分の有する大田莊莊務権を金剛峯寺衆徒に寄進し、自身は無一物となったのである（前掲「僧鑿阿起請相折帳」）。

高野山は、空海以来、「怨親平等」観念、すなわち、「仏教の大慈悲の精神に立って、敵も憎むべきではなく、味方にも執着してはならず、平等にこれらを愛憐しなければならない」という考え方が嫡々と相承されてきたお山であった。この鑿阿上人もまた、「怨親平等」観念を内在化し、私心を捨てて、生きとし生けるものの幸福を祈り、利他行（自分を犠牲にしてでも他人の福利を図る修行）を実践する僧侶であった。

鑿阿、もとより苟<sup>いやしく</sup>も遁世<sup>とんぜい</sup>の身として、別の同行<sup>どうぎよう</sup>なし。ただ且つうは仏法を興隆せ  
んがために、且つうは 大師の深恩に報い奉らんがために、且つうは国家安隱<sup>(禪)</sup>のた  
めに、且つうは諸人快樂<sup>けらく</sup>のために、愚意の及ぶところを以て、公家に奏聞<sup>そうもん</sup>せしめ、行  
法を始むるばかりなり（前掲「僧鑿阿起請相折帳」）。  
とは、そのような高野山僧の気概を示す言葉である。このような僧侶たちの至誠に、多く  
の人々が共感し、支援を惜しまなかった。高野山の密教文化は、このような名僧たちの至  
誠と数多の人々の共感・支援とが両々相俟<sup>あいま</sup>って初めて花開いた、と言うべきであろう。

#### 山陰 加春夫（やまかげ かずお）プロフィール

1951（昭和26）年、和歌山県高野山に生まれる。

1973（昭和48）年、大阪市立大学文学部史学地理学科卒業。

大阪市立大学大学院、高野山大学大学院、高野山大学教員、高野山霊宝館副館長を経て、  
現在、高野山大学名誉教授、博士（文学）（大阪市立大学）。専門は日本中世史。

〔主要著書〕

『きのくに荘園の世界』上・下（共著・清文堂出版、2000・2002年）

『中世寺院と「悪党」』清文堂出版、2006年

『巡礼高野山』（共著）新潮社、2008年

『新編中世高野山史の研究』清文堂出版、2011年

『歴史の旅 中世の高野山を歩く』吉川弘文館、2014年